保育場面におけるリレー大会を通しての子ども達の学び

明星大学教育学部教育学科　特任准教授　内　田　裕　子
港南台幼稚園　教諭　西　村　朋　美
港南台幼稚園　教諭　早　川　聡　子

What Kindergarten Children Learned from Relay Races

Hiroko Uchida
Tomomi Nishimura
Satoko Hayakawa

１．問題の所在と目的

2020年度の始まりは、新型コロナウイルス感染症による緊急事態宣言下にあり、幼稚園では休園を余儀なくされた。緊急事態宣言解除後の６月から園生活がスタートしたものの、新しい生活様式の必要性、三密の回避、マスクの着用、今まで以上の手洗い・うがい、消毒等、保育を取り巻く環境も大きな影響をうけた。さらに、昼食時は、机をパーテーションで区切り話をしないで食べる、椅子を離して座る等物理的な環境だけでなく、子ども達同士が密にならないような保育内容とすることが求められ、様々な活動や行事も今まで通り実施することが実質的に困難となり、園ごとに試行錯誤している状況が続いている。

例年にない状況下でのスタートであった2020年度の保育について、例年と同じように学びの保障ができていたかは、今後比較検討が必要になってくるだろう。そのためにも、本年度の子ども達の育ちについて、まとめておくことは必須であろう。

そこで、コロナ禍によって例年にない状況下において、年度の締めくくりにむけて行われた年長児による園内で行われたリレー大会への取り組みの中で、子ども達が経験した学びや子ども達の育ちの現状を報告する。

２．方法

１）対象園：横浜市私立Ａ幼稚園
２）対象児：年長児２クラス（各クラス20名）
３）期間：2021年１月15日（金）～2021年２月３日（水）の保育中にリレー大会を含むリレー遊びが行われた時期。本報告での、リレー大会は、園内での保育活動の一つであり、クラス対抗戦で８回行われた。円を１人１周走り、バトンをつなぐリレーである。
４）報告の手続き：リレー大会があった期間の、保育者による日誌と動画撮影記録の２つの記録をもとに、子ども達の変化や学びを追いまとめていく。日誌は、各クラス担任が毎日の保育での子どもの姿を書き出すエピソード記録であり、リレー遊びやリレー大会についての記述がある部分を抽出した。動画は、デジタルカメラを用い、担任保育者とフリー保育者が、リレー大会やリレー遊びなどリレーをしている場面やリレー大会に向けて話し合いをする場面を中心に適宜撮影した。また、日誌と動画を用い、担任と第一筆者で週１回カンファレンスを行った。さらに、リレー遊びが終了した時点で、リレー大会に向けての子ども達の話し合い、個と集団とのかかわりなどを中心に、子ど

も達の変化や学びを考察した。

本報告にあたっては、対象園・対象園の保護者に説明および同意を得た。また個人を特定し得る情報は匿名化した。

３．対象園の概要

対象園は住宅街の中に位置している。園庭は起伏に富み、四季折々の表情を見せてくれる木々が茂り、その木々を囲むように２階建ての園舎がある。園の保育は、従来からのキリスト教保育をもとに、遊びを中心にした保育を行っている。クラス編成は満３歳１クラス（うさぎぐみ）、３・４歳児の縦割り３クラス（あか・もも・きいろ）、５歳児の横割りで２クラス（みずいろ・むらさき）となっている。支援の必要な幼児の受け入れをしており、2020年度の年長クラスには、約４割在籍している。

４．みんなの時間の取り組み

対象園では、主体性を大切にし、自由な遊びの時間を中心とした保育を行っている。しかし、2020年度のスタートは例年にない状況下であり、子ども達の学びを保障することと、クラス意識や多くの友達との関りを多く持てるようにという目的で、意図的にみんなの時間を設定した。みんなの時間の保育内容については、自由遊びの中で観察された遊びをもとに、行事につなげながら設定した。具体的な内容については、表１に示した。

表１　2020年度みんなの時間の保育内容

時期	メインテーマ	内容
６月～７月	さかなつり	魚の製作 釣り堀を作り、釣って遊ぶ
９月	夜まで幼稚園にむけて	お店の看板製作 的あての的・弓矢の製作
９月下旬～10月上旬	運動会にむけて	玉入れ・ボール遊び かけっこ
10月中旬～11月上旬	秋祭りにむけて	お店屋さんの品物・チケット・レジスター等の製作 大きなかぶ・オリジナルの劇やダンスを作り上げ発表
11月上旬～12月	クリスマスにむけて	ろうそくつくり クリスマスページェント
12月中旬～１月	刺繍	毛糸針と刺しこ糸を用い、自由に刺繍
１月	正月遊び	ダジャレかるた・すごろくの製作・遊び
１月中旬～	チャレンジ	こままわし・縄跳び
１月中旬～２月上旬	リレー	クラス対抗リレー大会（保護者参観あり）
２月～３月	劇遊び	自分たちの演じたい作品をもちよる 劇作成（台本・小道具等含む） 劇発表
２月～３月	織機	ポシェットつくり（卒園製作）

５．リレー大会中のねらいと取り組み

リレー大会は、年長進級時から取り組んできたみんなの時間で経験したことをもとに、クラス全員で、力を合わせて一つのことに最後まで挑戦することをねらいとして行われた。そのため、子ども達同士で話し合う機会を大切にし、自分の意見を伝えたり、友達の気持ちを汲み取りながら走る順番を子ども同士で決めたり、帰りの会でその日あったリレー遊びに関することを振り返りながら次への期待が持てるように促したりした。

また、保護者参観日を設け、子ども達がリレーに取り組む様子を保護者にも見学してもらった。リレー大会中の詳細は表２に示した。

表２　リレー大会中のリレーへの取り組み

日	天気	リレー大会の有無	ひとクラス当たりのチームの数	自由な遊びの時間のリレー遊びの有無	その他
１月15日（金）	晴			○園庭	
１月18日～１月29日の保育のねらい リレー大会を通して、いろいろなことに挑戦したり、みんなで一緒に取り組んだりする楽しさを知る					
１月18日（月）	晴	○	3		
１月19日（火）	晴	○	3	○園庭	
１月20日（水）	晴	○	3		
１月21日（木）	晴				
１月22日（金）	晴			○公園	
１月25日（月）	晴	○	3	○園庭・公園	保育園とのリレー大会 保護者参観
１月26日（火）	晴			○園庭・公園	
１月27日（水）	雨時々曇り				
１月28日（木）	曇りのち雨	○	2		
１月29日（金）	晴	○	1		保育参観
２月１日～２月12日の保育のねらい クラスのみんなで力を合わせる。最後まで力を出し切り達成感を味わう。 自分の考えを伝えたり、相手の考えを聞いたりして自分たちで決定する経験をする。					
２月１日（月）	晴				
２月２日（火）	雨のち晴れ	○	1		保護者参観
２月３日（水）	晴	○	1		保護者参観

６．事例と考察

事例１　みんなで話し合いをする場面を中心に

１月20日（水）

◎順番を勝手に決めようとするＣをみて、違うチームのＤが「Ｃちゃんだけが決めない方がいいんじゃない」と言うと、Ｅが「私１番が良い」と自分のやりたい順番を伝えた。その後も他児がやりたい番

号を言うことができ、まとまるかと思うと、Ｆが「６番が良い」と譲らない。Ｃは「アンカー（６番）がやりたい」と譲らない。同じチームの子もどうしようもない状況だったので、担任が間に入るが、お互い譲らず、クラス全体に呼びかけてみると、「じゃんけんがいいんじゃない」と意見が出るが、ふたりともじゃんけんは嫌と譲らない。そうしているうちに、相手が７人いるということで、誰かが２回走らないといけないことがわかる。すると、Ｃが５番とアンカーを走ることに。Ｆも６番を走れることになった。

◎２回戦目を行うことになり、走順を再び相談することに。Ｇが「アンカーをやりたい」とチームの友達に伝えるが、Ｈも「アンカーをやりたい」という。Ｈは１回目にアンカーをやっていたことから、Ｇは「２回続けてはずるいよ」というが、Ｈは譲ろうとしない。Ｇが「じゃんけんで決めようよ」と提案するが、Ｈはじゃんけんをすることを拒否。担任が話をしようとするが、Ｇはあきらめ、Ｈがアンカーをやることになった。

◎リレーを終え、話をまとめようとすると、Ｉが「Ｊが、一緒に走っていたＫにからかうような言葉を言われていた、(勝っているからと)ふざけて走っている人がいて嫌な気分だった」とみんなに伝える。見ていた子ども達も「ふざけて走っちゃだめだよ」「一生懸命最後まで走らないとだめだよ」「ぬかされた人が嫌な気分になるよ」など意見を言っていた。

１月25日(月)

◎Ｄは「僕１番でもよい？」とみんなに確認して、１番になることができた。Ｄにならい、「僕は２番でいい？」「３番でいい？」となりたい順番を言い合いながら走順を決めていた。

１月26日(火)

◎Ｋが、速い・遅いの順番にすれば、もし遅くても相手チームに遅れをとられないんじゃないかという内容のことを、みんなに説明していた。

１月29日(金)

◎この日から、クラス全員で１チームとして対戦することになり、保育室で順番を決めてから公園に行くことにした。Ｌは、クラス対抗は負けるかもしれないから嫌だというが、なんとか折り合いをつけ参加することができた。Ｍは１番を走りたいと決めていることを担任が知らせた。(中略) 順番を決めようとすると、男・女で順番に走ればよいのではと意見が出る。また、自分が走りたい順番も言えるようになっており、重なった場合は、じゃんけんだけでなく譲り合う場面も見られるようになってきた。

◎１回戦を終えると、もう一度やりたいとの声が多いが、やりたくないという子もいる。「走りたくない子は応援でもいいんじゃない」という声もあるが、クラスみんなで頑張ってほしいということを担任から伝えると、やりたい子たちの願いにこたえるように、やりたくない子も納得してくれた。みずいろ組は負けが続いているので、もう一度順番決めをすることに。Ｎが「男・女・男・女にしよう」と提案、「速い・遅いがいいよ」という子もいたが、男・女にすることになった。そのうえで「一番が良い」「アンカーが良い」という子ども達が集まり、じゃんけんで１番とアンカーを決めた。１番から順に、男・女・男・女と並んでいくと、アンカーのところで、男・女の並びにならないことがわかる。アンカーをすることになっていたＬは、アンカーをやりたい気持ちはあるが、みんなの意見を聞き、アンカーの１つ前で良いとアンカーを交代した。

２月３日(水)

◎昨日の振り返りをしながら今日の走順を決める。すると、「Ｏくんが２回目走るの早かった」「みんなで頑張って昨日も勝てた」と話がでる。昨日、アンカーをやりたい子が多かったため、アンカーから決める。Ｐはずっとアンカーだったからとアンカーを希望しなかった。アンカーがやりたい７人で、決め方を話す。すると、Ｑがリードしながら話を進め、「３人と４人に分かれてじゃんけんをして、勝った２人がじゃんけんをして決めれば」と提案し決定した。また、１番を走りたい子も何人か出た。そ

れまでは、担任が「Mは１番なら走れる」ということをみんなに伝え、Mが１番を走っていたのだが、今日は、M自らが「１番なら走れる」と伝えると、１番がやりたいと手を挙げた子も、譲ってあげたり「Mにしてあげよう」と意見を出したりしていた。また、いつも２番目を頑張っているRの気持ちもくみ、３番目から順に手をあげ、何人かいたときにはじゃんけんで決めていた。

考察１

６歳頃は、子ども同士で意見を出し合い、みんなで楽しくあそぶにはどうしたらよいのかを考えることができるようになる時期である（河原，2011）。今回のリレー大会では、子ども達同士で話し合うことにねらいをもっていたため、子ども達が自分の意見を伝えやすく、受け入れやすいよう少人数のチームから取り組むこととし、クラスを３つのグループ（１グループあたり６～７人）に分けてスタートした。はじめは、どうしてもやりたい順番を譲ることができなかったり、決める方法に納得がいかなかったりする場面が見られたが、保育者がそれぞれの想いを伝え、話し合いを促すことでリレーへとつなげていった。それを繰り返すことで、徐々に子ども達同士で折り合いをつけていく様子が見られた。さらに、人数が増えクラス全員での話し合いでも同様の姿が見られた。さらに話し合いの中で、やられたら嫌なことを伝えたり、他者を認めたりする姿が見られ、より楽しく遊ぼうとしているように思われる。

内田（2012）は、子ども達は、楽しく遊んだ経験が積み重なると、一緒に遊びを継続するために妥協案を提示したり、自分の意見を調整したりすることができるようになってくるとしている。今回の取り組みでも、同じように、リレー遊びに楽しく継続して取り組むことで、楽しさを感じる事ができ、自分の意見を押し通すだけでなく、相手に譲ったり、意見を調整したりすることができたのではないかと考えられる。

事例２　みんなは仲間だ

１月18日（月）

◎応援隊の２チームは、円の外に出ると自然と、クラスごとにわかれて座り、「○○くん頑張れ」「○○ちゃん頑張れ」と、自分のクラスの友達の名前を、呼吸を合わせて呼びながら応援をしてた。自分のクラスを応援することに力が入り、先に走ったチームが負けると次のチームは順番決めをやり直すところもあった。

１月25日（月）

◎自由遊びの時間に、みずいろ９人、むらさき７人が園庭でリレーをしていたが、走る仲間が見えるところでリレーをしたいということで、隣の公園に移動してリレーをすることにした。一度走り終えると、同じく公園に遊びに来ていたB保育園の年長児が、「一緒にリレーの対戦をしたい」と声をかけてくれ、対戦をすることになった。自分達よりも速く走ることができるB保育園の子ども達に、圧倒されている子もいた。負けじと応援に力が入る子もおり、クラスの枠をこえて「A幼稚園頑張れ」と言って、同じ園の友達が勝てるように大きな声をだして応援する姿があった。

１月29日（金）

◎１列に並ぶと、走順が同じ子を確認し、「僕早いから○○ちゃんには勝てるや」「○○君とだ。やったー」という声が聞かれるようになった。応援の声も、後半になるにつれ大きくなってくる。また、走り終わった子もこれから走る子も始めは座っているものの、声が大きくなるにつれ座っていられず立ち上がり、声に合わせてジャンプをしながら応援していた。

◎負けてしまったみずいろ組が公園から園に戻る途中、Dが「本気で走ってない人がいるからだよ」というと、Cが「私がバトン落としちゃったからだよ」と負けた原因は自分であると答える。帰りの会では、バトンの渡し方について話しあう。貰ってからゆっくり走りだせばよいという意見もあったが、バトンを渡す時と貰う時はゆっくりにし、貰ったら速く走るということになった。また、渡すときは、名前を言って渡す約束をした。

２月３日（水）

◎リレーが終わりむらさき組保育室に戻ると、Ｓが、「全部勝ってみずいろ組さんにごめんなさいって気持ちになる」、Ｔは「やったーって言っちゃたし」とつぶやく。Ｉが以前に「やったーって言わないで」と言っていた為、その後、ＳとＴは桃太郎の劇の準備の時に「さっき、やったーと言ってごめん」とＩに伝えていた。すると、ＳとＴ以外の子ども達も一緒になってＩに伝えていた。

考察２

自分のクラスの友達の名前を呼びながら、また保育園とのリレー大会での「Ａ幼稚園頑張れ」という応援する姿から、帰属意識が育っていることがわかる。湯汲（2017）は応援することで、結びつきが強まるとしている。この事例でも、声を上げて応援することで仲間との結びつきが強まっていると思われる。

リレーは勝ち負けのある遊びであり、負けるチームがある。負けたことを、誰かのせいであるかのような発言も見られたが、クラスのみんなで勝てるようにどうしたらよいかと考えられるようになってきた。また、リレーで負けて悔しがっているだろう友達にかけた言葉に対して悪いと思い謝りに行く姿からも、相手の気持ちに寄り添うことができるようになっており、仲間に対する想いが強くなってきていることがわかる。

幼児期には友達と関わる中で「○○ちゃんは何が上手」といった他者の特性理解が進む（内田，2012）。事例からも、友達と比較する場面も見られるようになり、他者理解もできていると思われる。と同時に、「僕は早い」という自己理解もできるようになっており、こうした他者・自己理解がベースとなって、みんなが頑張っているから私もやってみようという姿や私も頑張らなければという姿へとつながっていったと考えられる。

事例３　個の成長と集団との関わりから

１月15日（金）

◎急遽リレーをすることになった。やりたくない子は、見ていた（応援）。途中Ｒが「やってみようかな」と担任に知らせる。「半分なら走れるかも」といいながら、１周走ることを決めた。自分が走ることが苦手なことを同じチームの子に伝えると、「真ん中（の順番）に走ればいい」と言われ入れてもらう。１周走り終えると、ＲにバトンをＵがＲに「頑張ったね」と手を握って伝えていた。帰りの会でも、「誰か１人が、自信がなくてもチームで頑張ればよい」ことを確認した。

１月18日（月）

◎Ｒが、家から、リレーが不安なこと・足が遅いから力を貸してほしいことを手紙に書いて持ってくる。みんなの前で読むことができた。女児を中心に「私が一緒のチームになってあげる」と声をかけたり、「真ん中（の順）に走るといい」とアドバイスをしたりする子もいた。Ｒは実際に走ることができ、少しずつ自信になってきた。走りたくない子もいたが、今日はみんなで走ろうと提案するとそれぞれ力を発揮していた。

１月29日（金）

◎Ｍが１番を走りたいと決めているので、担任がみんなに知らせた。Ｒも早めに走ると、みんなが後から抜かせるのではと提案すると、Ｒが２番目を走ることになった。みんなの力が合わされば勝つという経験をしたＲは、当初はリレー大会に対する不安があったものの、「不安がなくなってきた」と言っていた。

２月２日（火）

◎ＲとＶは、前回は２回目を走ることを嫌がっていたが、今日は嫌がらずに走っている。

２月３日（水）

◎２回戦目のアンカー交代の場面　Ｗが「２番目に走りたい」という。Ｒは迷うが、Ｗに譲って３番目

に走っていた。

考察３

事例３では、Ｒがリレー遊びへの参加を通して、どのような変化が見られたか、また、周りの子ども達がどのような影響を及ぼしているかを考えたい。Ｒは配慮の必要があり、リレー大会に対して不安な気持ちを持っていた。そのような中、担任や親の力を借りながら、不安な気持ちをクラスの友達に伝えられたことはＲにとっては大きな成長である。また、Ｒの想いを聞いた子ども達も、Ｒの気持ちを受け入れ優しく言葉をかけている。優しい言葉をかけてもらい、Ｒも頑張って走り、勝負に勝てたことが自信となり、Ｗに走順を譲ることまでできた。Ｒが最後まで嫌がらずに取り組めたことは、優しい言葉をかけた子どもにとっても自信につながり、クラスの中の子ども達にとっても走りたくないと思う子ども達にも、やってみようという気持ちになるきっかけとなっている。互いに助け合う気持ちが生まれ、友達関係の深まりがあったと考えられる。

７．総合考察

リレーは、ルールのある遊びである。今回の保育のねらいは、リレーというルールのある遊びの中で、クラス全員で話し合ったり、１つことに最後まで挑戦したりすることであった。今回の事例からは、走順を決める話し合いをする中で、子ども達だけではうまく解決できない場面も見られたが、自分の想いを伝える、相手の気持ちを受け入れる、折り合いをつけるなどの姿が見られた。さらに、リレー大会を通して、応援する、優しくする、妥協する、慰める、仲間へ思いやりを持って接する、諦めずに最後まで取り組む姿も見られた。

塚本（2018）は、トラブルを通して子どもが学ぶこととして、「他者理解」「言語能力」「自己理解」「先を見通す力」「自己制御」を挙げている。今回の事例でも、様々なトラブルを通して、他者理解、自己理解、自己制御ができるようになった姿が見られた。保育者が､子ども一人ひとりの自己主張を受け止めながら、主体性を大切にして見守ることで、子ども達は、自己主張と自己抑制を組み合わせながら、自己抑制能力を高める事ができたのではないかと思われる。

さらに、河原（2011）は、６歳頃では、「勝ち・負け」へのこだわりも強くなり、運動が苦手な子やルールの理解が追い付かない子を責めるといったトラブルも発生するとしている。両クラスとも、負けた事を悔しがり誰かのせいにしようという姿が見られたが、徐々に、誰かのせいではなく、クラス皆で頑張ろうとする傾向が見られた。また、湯汲（2017）は、ルールを守るから集団あそびが成立する。従って、ルールを守ることが、勝ち負けよりも重視される。負けたことよりも、ルールを守れる自分に自信を持てるようになる。また仲間を応援したり慰めたりしながら、集団のつながりは強まってくる。さらに、負けても泣かない、大騒ぎをしないなど「成長していく、大きくなっていく」自分にも誇りを持てるようになれるのであろうとしている。今回の事例でも、子ども達一人ひとりが、それぞれの良さを認め合うと同時に、自分に自信を持つことができた姿も見られた。今年度は、学年の始まりが遅れたわけだが、自由な遊びの時間を十分に確保したうえで、リレー大会を含めた子ども達の想いに沿ったみんなの時間で友達と一緒に活動をすることで、それぞれの良さを理解する場面が増えたことも、今回の結果に影響したのではないかと考えられる。

８．今後の課題

初めに述べたが、2020年度の保育については、例年と同じように学びの保障ができていたのか今後比較検討が必要になってくるだろう。それだけでなく、今回の対象期間には、自由遊び場面でも、リレーで

もっと遊びたいという子ども達が集まり、自分たちで環境を整えたり、チーム分け・順番決めをしたりして、みんなの時間での取り組みを自由遊びの時間でも取り入れて遊ぶ姿が見られた。及川（2018）は、「ルール遊びの発展と設定保育の経験との関連を調べ、幼児にとって自由遊びのリレーごっこは、設定遊びのリレーとはまた別の活動として位置付けられていた。」としている。子ども達にとって、みんなの時間が自由遊びの時間にどのような影響を及ぼしているのかも検討していく必要があると思われる。

また、リレー大会が行われた時期の日誌には、すごろくやかるたを製作し遊ぶ姿や、こまや縄跳びに挑戦する姿、野鳥を観察しその結果を図鑑として作成する姿、劇遊びに取り組む姿がみられ、リレーだけでなく他の遊びも充実している様子がうかがえる。今後は、これらがどのような関連があるのかを検討したうえで、子ども達が経験している学びを考察する必要があるだろう。また、今回は年長児の３学期の姿をとらえた。就学前であることを考えると、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿に基づく考察も必要であろう。

参考・引用文献

河原紀子（2011），０歳～６歳子どもの発達と保育の本，学研，81
及川智博（2018），ルール遊びの発展と設定保育の経験との関連：５歳児のリレーごっこに着目して．心理科学，39（1），52-72.
塚本美和子（2018），対話的・深い学びの保育内容　人間関係，萌文書林，128-129
内田伸子（2012），よくわかる乳幼児心理学，ミネルヴァ書房，145-147
湯汲英史（2017），０歳～６歳子どもの社会性の発達と保育の本，学研，67-68